



Title	初代教父における創造の問題
Author(s)	加藤, 邦雄
Citation	基督教学, 1, 14-19
Issue Date	1966-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45794
Type	journal article
File Information	1_14-19.pdf



初代教父における創造の問題

加 藤 邦 雄

正統的と一般に言われている神学において「創造とは無から物を造り出すことである」と定義されることが多い。たとえば Heinrich Heidegger の *Reformed Dogmatics*, p. 190 などにおいてそうである。教理史の書物を開けて見ると大體において、紀元二世紀半頃から、「無からの創造」(*Creatio Ex Nihilo*) なる表現が用いられ始めた、書かれている。そこで、何故に「無からの創造」なる句が必要であったのか、その歴史的事情をいささか明らかにして見たい。

元来、「創造」なる語は、聖書においては独自の用法にしたがって用いられていた。たとえば、Köhler の *Hebrew Man* なる書物を見ると、ギリシヤ人にとって世界は、美しい秩序としての *Cosmos* であった。ローマ人にとってそれは *Natura* すなわち生長するものである。しかし、ヒブル人にとって、それは *olām* すなわちかくされた物、知られざるもの、秘義的なものであった。旧約聖書において、創造とは客観的な宇宙生成のことであるよりは、人間歴史における神の *Heilsgeschichte* であった。Köhler は *Theologie des Alten Testaments* の中でそのことを明らかにし *Schöpfung* とは *Eschatologisch* な Begriff であるとして断言してはばからない。Von Rad が *Schöpfung* を *Heilsgeschichte* と理解していることは衆知の通りである。

新約聖書において、パウロが「ガラテヤ書」6:17その他で創造とはキリストにおいて人間が神との関係を回復することとして理解していることに就いては今日多言を要しない。そのパウロがローマ書4:17で「無からの創造」をあらわす句を用いている。しかしその句は前後の関係から見て *Heilsgeschichte* としての神の恵みをあらわす文章であ

ることには全く疑う余地がない。Michelによると、パウロがこのような表現を用いたのは後期ユダヤ教の Liturgy に由来すると言う。

旧約聖書外典 Apocrypha の中に収められている「マカバイオス書」二巻7:38に「存在していた物から神がかれら造ったのでなかった」なる句がある。この文章は恐らく紀元前二世紀の半頃に書かれたであろうが、マカバイオス書の著者は、ここで、哲学的あるいは科学的な意味で「無からの創造」を語っているのではなくて、全能者を天地の主と呼ぶ信仰の告白をしている意味においてそのような文章を書いたのである。迫害の中に置かれた信仰者が、神の全能を確信して、神に呼びかける時、天地の創造者よ、なる語がしばしばその口から出るが、それと同一の意味で用いられたのである。

新約聖書においても、神への讚美や、祈りを力強く言いあらわす時、「天と地との主」と言う表現が用いられている。たとえば、ルカ伝10:21や使徒行伝4:24などがある。ここに「無からの創造」なる句はないが「天と地との主」と言う時、天地の起源を語るよりは天地の支配者すなわち人間の歴史の支配者であると言う意味である。

紀元九十年代に書かれたと推定される、ローマのクレメンス書簡は、年代的に新約聖書に近いのみならず、その思想も、新約聖書に可成り近似していると言えよう。ローマのクレメンス書簡の中に「創造」または「創造する」または「創造者」と言うような語はかなり多く用いられている。しかし、その中で「無からの創造」なる表現は一回も用いられていない。神を「父」と呼ぶ個所で「宇宙の創造者」と続けて呼んでいる個所がたくさんある。それによって判るように、「宇宙の創造者」とは、科学的あるいは哲学的な意味で、宇宙の起源であるべき創造者を指している、これを解するよりは、やはりキリスト者の父を創造者と呼んでいると解釈されよう。この意味で Kittel, Theologisches Wörterbuch の「創造」(κτίσις)の項で論じられているように、聖書において Schöpfung は Erhaltung と同じ意味であると言う主張から、ローマのクレメンス書簡は余り離れてはいないようである。それについては、同書簡に

おいて以下の個所を参照してもらいたい。19 の 2, 59 の 3, 62 の 2.

しかし、ローマのクレメンス書簡の中に、被造物の秩序 (*ἡ ποικιλία*) を通しても、ある程度まで創造者を人間が知り得ると教えている個所があるか否かについては、なお詳細な検討を必要とするであろう。少なくとも、被造物の *Urgrund* あるいは *Abgrund* としての *ποικιλία* をその著者は語っているように見える。教理史家 Seeborg などはこの点については、肯定的な見方をしているようである。しかし、この点については、これ以上追求することを止めて、次の著者に移りたい。

紀元百十年代の作として、イグナチオスおよびポリュカルポスの書簡が残されている。それらの中に「創造」に関する語はいくらか含まれているが、イグナチオスやポリュカルポスが、創造について、特に他の人々ときわ立って区別されるような思想を抱いていたことを示すものは、その書簡の中に見出せない。また「無からの創造」と言うような表現は一回も出て来ていない。

「十二使徒の教え」、普通これをディダケーと呼ぶが、これの成立の年代は人によって意見が相違する。ある人は紀元百年頃に書かれた部分と、二世紀の半頃に書かれた部分とに区別するようであるが、いづれにしても、ディダケーの中に、創造についての特別な思想は見られないようである。少なくとも「無からの創造」なる思想は見られない。「バルナバの書簡」なるものがある。紀元二世紀の作であろうが、それを百年を余り過ぎなかつた頃に置か、二世紀の半頃に置か、人によって意見が相違する。バルナバ書簡の中に、創造について特に注意しなければならぬものはないが、その一五の三によると次のようなことが書かれている。すなわち、神は六日間で創造のわざを終ったが、それは宇宙創造が六千年かかって完成したことを意味すると述べている。すなわち、創造の一日は実は一千年間であったと言う解釈を加えている。これは、創造についての、いわば一種の合理的説明であって、素朴な創造についての考え方から、合理的な理解の仕方へと進展したことを示す。そして、聖書における創造の理解の仕方から、むしろ、

科学的世界観へと移って行ったかの如くである。察するところ、新約聖書のペテロ書簡の中に、一日は千年のごとく千年は一日のごとく、云々と言うような文章があるので、そのような句によって、一日を千年とする解釈が生れたのであろう。

「ヘルマスの牧者」なる一種の黙示文学がいつ頃書かれたかについて、ある人は紀元二世紀前半と見るが、またある人はそれを紀元二世紀の後半と考える。筆者は、もと、紀元二世紀の前半と理解していたが、今日ではむしろ後半ではなかったかと考えている。その Mandate I の 1, に明らかに「無からの創造」を教えた文章がある。

これに反して、紀元二世紀の半を少し過ぎた頃の作と考えられるユスチノスの「第一弁証」の十章の中には、神は「形をなしていない物質」によって万物を創造したと述べている。これは無からの創造ではなくて、一種の有からの創造である。ギリシャ人は、元来、無からの創造を考えなかった。むしろ、物質が永遠の存在であると考えていた。ユスティノスは、この点では、半ばギリシャ的であり、半ばキリスト教的であると言えよう。ユスティノスにおいて、ロゴスは一面から見ると宇宙の理性としても理解されていて、ストアイク哲学と相通ずるロゴス思想を抱いていたようである。それについてはユスティノスの「第一弁証」の四十六章や「第二弁証」の九章、さらに「トリフォとの対話」の三章などを参照すれば明白である。

ユスティノスの中に「無からの創造」なる表現は見出せないようであるが、かれにおける創造とは、聖書における Heilsgeschichte としての創造であるよりは、かなり哲学的な意味をもった、宇宙の起源についての解釈であるように見える。

紀元二世紀半頃、アンティオキアのテオフィロスに「アウトリコスへあてた」三巻から成る弁証がある。 Bethune-Baker の Early History of Christian Doctrine (p. 127) によると、テオフィロスの用法の中には、ことに三一の神についての用語の中には、フィロのそれと同じものが見られると言う。テオフィロスの「弁証」の第一巻四章に次ぎの

ような文章がある。「しかし、神は主である。なぜならば、神は宇宙を支配するからである。神は父である。なぜならば、神は万物の以前から存在するからである。神は作り主であり創造者である。なぜならば神は宇宙の創造者であり作り主であるからである。神は最高者である。なぜならば万物の上にあるからである。神は全能者である。なぜならば、神御自身は万物を支配し、万物を包んでいるからである。(中略)さらに神は万物を創造した。すなわち存在しなかったものを存在せしめた。それは神のわざによってその偉大さが知られ理解されるためである。」ここに、テオフィロスは「無からの創造」なることを明確に書きあらわしている。第一巻の八章にも「神はあなたを無から創造し存在するようにした」と言うような表現がある。

二世紀の半頃から、キリスト教の弁証家(Apologeten)が、このような弁証をしなければならなかったことには、当時の思想に対する止むに止まれぬ必要性があったと思われる。当時のヘレニズム一般が大体において「物質の永遠性」を主張していたこと、ことに、グノーシス派の諸宗教が、神は直接に物質には触れ得ないと言っていたことなどから判断すると、キリスト教の思想家たちがあえて、神は無から万物を創造したと主張したことには積極的な意味があった。

しかし、元来、Heilsgeschichte として聖書では理解されていた「創造」が、二世紀半になると、当時の哲学者たちとの対決することによって、キリスト教思想で言う「創造」もまた次第に哲学的な意味での宇宙起源論と言う世界観へと相当はつきりと変わって行った。ことに、テオフィロスにおいて、創世紀一章における創造の記事を文字通りそのまま科学的事実と見て、創造の年まで次のように計算した。すなわち、かれがアウトリコスに当てた弁証を書いた時はウエルス帝の治世として天地創造はそれから五六九八年前と言うことになっている。さらに、五六九八年と何か月何日とまで計算している。(第三巻二十八章を参照されたい。)ここに、後世の根本主義と相通ずる考え方が出て来ており、その立場の人たちが宇宙創造の年月日を計算する場合の一つの手がかりを用意したわけである。

エジプトのプトレマイオスの天文学が発表されたのは二世紀半であろう。そして、その天文学説はそれ以後千数百年の間ヨーロッパで定説であるかのように取り扱われた。その天文学と、アンティオキアのテオフィロスの聖書解釈とは、直接的に関係はないであろう。しかし、二世紀半において、テオフィロスがそのように宇宙創造を年代的にさえもすでに計算を終っていたと言う事実は、この頃のキリスト教界の思想家たちがかなりのカーヴを描いて世界観を変えつつあったことを示すものであると考える。すなわち、これ以後、イレナイオス、テルツリアヌス、アレクサンドリアのクレメンス、オリゲネスなどの「創造観」に相当決定的な影響を与えたように見える。あるいは、キリスト教界全体として二世紀半頃に、方向づけがはっきりなされた、と言った方が適切であろう。